

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 〔談話室〕 片仮名文とネ子の話

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 光一, Sano, Koichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000253">https://doi.org/10.57529/00000253</a>

## 片仮名文とネ子の話

佐野光一

今は昔、五十年前の中学校で、芥川龍之介の「羅生門」の映画を見た。暗幕を張った冷たい武道場の畳の上で、それは恐ろしく怖い物だった。何時も燥ぐ仲間も息を殺していた。芥川の歴史小説には「今昔物語集」に取材したものがあり、「羅生門」もその一つである。先年、その最も古い写本という「鈴鹿本」の図版を見て驚いた。それは漢字片仮名交じりだったのだ。芥川は晩年多くの河童の画を書き讀を附しているが、どういふ訳かその細い鐵線を用いた瘦せこけた像、よく彼の心象を写したものだ、琴線に触れる様な文字の美しい線と交錯した。彼の筆の線には、嘗て好んだ支那の龍門造像銘の鋭い直線の片鱗がある。彼は「今昔物語集」の片仮名本を読んだ事があつたのだろうか。

そも／＼片仮名は、平安時代の院政期頃は、ほぼ一字の字母が定まり、鎌倉時代には漢字片仮名交り文が成熟し、「古今著文集」「方丈記」「平家物語」などで記された。更に江戸や明治に至っても、童蒙書、初学書、注釈書、法令文等の類に、多く用いられた。書道の分野でも、江戸後期に出版された「米庵墨談」は、文の平易さと弟子の手に成る美しい片仮名本故に、明治から昭和と最も長く読み継がれた。明治中頃までの小学校の教科書や雑誌、新聞など漢字片仮名交りの書物は多い。このように、我国では七百餘年に渡り、片仮名文と平仮名文とは、文字の機能を重んじ、文の内容により、両者を使い分けてきた。

しかるに明治三十三年の小学校令が出され、事情は一変した。平仮名片仮名とも使用字母は一つに統一された。平仮名は<sup>ハル</sup>ハ、<sup>キ</sup>キ、<sup>ケ</sup>ケ、<sup>コ</sup>コなど常用の変體仮名も使っていたものを、教科書では禁止したのである。民間ではなお自在に使っていたが、教えない物はやがて使わなくなり、今では書や古典を専門に学んだ者以外書けなくなってしまう。こうして

我等は美しい平仮名文の伝統を失った。片仮名文にしても、外来語の片仮名表記の氾濫により、ほとんど使う場がなくなった。これは漢文をしつかり教えなくなり、漢学の素養のある者がいなくなつたことにもよる。少し前まであつた片仮名の電報文が懐しい。古い墓地に行くと、日清、日露の戦役で倒れた兵士の顕彰碑に、時に片仮名文がある。この簡潔で歯切れのよい文體と、謹嚴な楷書と片仮名による莊重な書の美はもう復活出来ないのだろうか。高村光太郎の書いた宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の石巻の碑と、墨東三圍神社にある上條信山先生の「古弦」碑は、昭和の片仮名文の碑の名品に入るだろう。日本中の名所旧蹟や神社仏閣、墓地公園に、静かに片仮名碑が立っているのに。平成時代はもうこれを継ぐ者は出ないのだろうか。

扱、本題の「ネ子の話」は「猫のコト」にあらず。片仮名の「ネ子<sup>ね</sup>の話」なり。小林芳規氏の調査では、平安時代の訓点のネは、子とネとが主であり、院政期になると子が圧倒的に多い。鎌倉時代も同様である。江戸の版本でも子がネより多い。明治中期までの小学校の五十音図等を見ても子が多い。ところが明治廿年代から国語学が興り、その中でネが子より優位に立つ状況が出てきた様だ。明治中期以降はネが増加し、やがて三十三年の小学校令でネが子を駆逐した。しかし民間ではなお子を用いていたから、小生の故郷の大正頃に生まれた人でイ子（稲の意カ）さんがいた。片仮名は一〜三画が多く四画は「ホネ」だけだ。画数が多いネがどうして採用されたのか。誰か知る人がいたら教えたまえ。江戸の本に、「学者は子の訓にして、しかも全體なるを嫌ひて」とある。シチツハミも全體だぞ。

嵯峨天皇は片仮名のねの文字を十二かかせたまひて、篁卿に読みとかせ給へりしに、

子子子子子子

子子子子子子

「ねこの子こ猫、ししの子こ獅子。」と読まれたという。この話「今昔物語」「宇治拾遺」などにあるという。これが真なら子は千有餘年の旧習なり。

(中国古代書法)